

# 探検・探査

6号

1998年6月

横浜市立大学 探検・探査の会

# 探検・探査の会 会報誌 6号 目次

あれから 30 年	幹事長	小森享二	1
黄柳野塾訪問記		田村康一	2
インドヒマラヤ・チャウチャウ峰登頂記		宮崎捷二	8
岩登りしましょう！		松林孝憲	11
韓国アカスリ日記		種子田美和	14
探検部入部まで		千葉香澄	16
釣りと私 最終章		星川 亮	17
会員近況報告			19
97年度 探検・探査の会 会計報告	会計	佐々木仁	22
98年度 探検・探査の会 総会報告		事務局	23
横浜市立大学探検・探査の会 会則		事務局	24
会員名簿		事務局	26
編集後記			

1968年、すなわち今から30年前に私は横浜市立大学に入学すると同時に探検部に入部した。当時はキャンパスもまだ木造の建物が多く現在のたたずまいとは大きく違っていた。何故、探検部に入部したかは今、思い出そうとしてもはつきり思い出せないが、とにかく大学にしかないユニークな部だという印象をもっていた。高校時代は中学から引き続いてバスケット部で活動していた。私は中学の頃はまだレギュラー選手として活躍出来たが、高校に入ると下級生よりも背が低くレギュラーの座は巡ってこなかった。そんな思いもあったと思うが、やりたければ、どの様なことにも挑戦できるという探検部に魅力らしきものを感じていたように思う。それから私は当時、海外へ出たくてしかたがなかった。海外旅行が自由化されたのは1964年のことで、持ち出せる外貨も500米ドルまでであった。レートは固定で1ドルが360円。海外旅行に行ける人は余程の金持ちしか一般的には許されなかつた時代である。その点、探検部に所属して海外に行く隊に潜り込めば、結構簡単に海外へ行けるかもしれないと、実に甘い考えを抱いていた。当時、探検部はフィリピンへ2回、台湾へ1回の海外探検の実績があった。私が入部したばかりの頃は、南インド方面の海外探検が準備されていた。しかし、この隊は諸事情により渡航には至らず、解散となってしまった。そして翌年、2年生の時にフィリピンのスールー諸島への探検計画が持ち上がった。私の実家は商売を営んでおり、当時、苦境にあったことから、休暇中は実家に戻って家業の手伝いをするという約束になっていた。それに兄は大学を休学してフルタイムで家業の中心となって働いていた。そのような状況にあって、約束を破つて、そして兄に恩を仇で返すような真似をすることは、非常に心苦しいことであった。しかし、私は思い切ってフィリピン行きを決意した。勿論、両親や兄には相談などせず、フィリピンに行くことになったことだけを告げた。その時、兄は相當に不満らしかつたが、父の「時には大学生らしいことをさせてやってもいいではないか。家に縛り付けるのは、可哀想だ。」という言葉で踏ん切りもいいではないか。家に縛り付けるのは、可哀想だ。」という言葉で踏ん切りがついたらしく、出発前には餞別までくれた。家族には申し訳ないが、私は今でも探検部に入って本当に良かったと思っている。フィリピン探検を中心とした探検部の活動を通じて私は人生における『夢』、『勇気』、『友人』の大切さを知ることができたからだ。

## 黄柳野塾訪問記

田村 康一（1985年入学）

1998年3月7～8日、私と居候の小森啓二（1990年入学、現在無職）は、愛知県北設楽郡でフリースクール『黄柳野塾』を主宰する吉見敦司を訪れた。

7日、午前11時に川崎の自宅を出発する。東名高速に乗り、約3時間走って浜松西ICで下りる。そこから国道257号を北上し、愛知県へ。谷間の隘路を通ってひたすら北上し、設楽町に入る。

「町に入ったら国道257号沿いに“したら舞茸”的幟が立っている。そこを左折」といった吉見のアバウトな説明で、本当にたどりつけるのだろうか。目を皿のようにして幟を探すが、立っているのは「スピード落とせ」といった交通安全のたぐいの標識ばかりである。町役場のある集落を通り過ぎ、車はどんどん高度を上げて峠を登り詰めていく。周囲には人家さえまばらになってきた。

「通り過ぎたんですよ。引き返しましょう」こんな寂しいところにあるわけがないと言わんばかりに、ドライバー小森が泣きを入れる。時計をみると、16時を回っている。もう帰ろうと思った矢先、車が丁度峠のてっぺんにさしかかったところに、『したら舞茸』のピンク色の幟が風にたなびいていた。

中にはいると、朽ち果てたテニスコートの横にバラックのような建物があり、どうやらそこが塾の本部らしいと推測する。車を降りたとたん、放し飼いの犬が猛スピードで突進ってきて、私の手を噛もうとする。

テニスコートには強風が吹き付け、空き缶がカラカラと転がっている。まるで西部劇にててくる廃墟のようなところである。

吉見はテニスコートの向かいにある工場で、舞茸の栽培に従事していた。塾の卒業生だという少年に言われるまま、我々も舞茸の苗床である大鋸屑の入った袋を、棚に並べる作業を手伝わされる。

現在、塾に生徒は在籍しておらず、開店休業状態であった。吉見は塾のOBの少年4人（不登校等により高校に行かなかった17～20歳）らと出資して『こども有限会社すいみい』を設立し、代表取締役に就任していた。

会社は舞茸や椎茸等、農産物の生産・加工・販売を主たる業務とし、塾の運営も会社の業務の一環として位置づけている。「農業等の生産活動を通じた人間教育」が基本理念だそうで、最初は無気力で昼夜逆転の生活を送っていた子供たちも、農産物の生産や販売に携わることで主体性や責任感を持つようになってきたという。たしかに、塾のOBの子供たちは、生産や販売を任せられているという自覚からか、皆一様に“いい顔”をしており、事業を通じての教育効果は外見からも容易にうかがうことができた。

ただ、企業として事業を採算ベースにのせるのは難しいようで、社長である吉見の昨年の年収は僅か25万円、舞茸の生産も大幅な赤字であると聞いた。吉見も理念と現実のギャップに苦しんでいるようだが、

前向きな姿勢を崩そうとはしない。今年はトマトの栽培やパンの生産を行い、事業の幅を広げる予定であるという。

探検部の部室を思わせるとっちらかった事務所で、「座学と実学の統一」という壮大な理念を掲げ、個人的に借金をしてまで理想の教育と地域興しの実現に燃える吉見を、我が探々会においてもささやかながら

応援しようではないか。

黄柳野塾では舞茸や椎茸の他に、たまごスープの販売も行っており、これらの収益により塾が運営されることになっている。詳しくは別紙を参照して頂きたいが、舞茸、たまごスープともになかなか美味であることを付け加えておきたい。

(1998年3月31日記)



かねてよりお知らせしてきた「子ども有限会社」が、黄柳野塾OB5人と塾スタッフ、(有)黄柳野企画、黄柳野高校のスタッフの出資により、設立されました。

昨年の8月号で設立趣意書をご紹介しましたが、この会社は、子ども達が、単なる体験ではなく、本格的に労働に参加し、本当に良いものをつくるにはどうしたらよいか、お客様が喜んでくれるにはどうしたらよいかを真剣に考え、その中で、生き物や地球環境、経済や会社の仕組みなど、あらゆる事を勉強していこうというものです。「自ら考え、実行し、責任をもってやり遂げる、人にとって本当の意味で自立していく」ということはどういうことなのか、子ども達とともに探りながら、パンづくりや舞茸の加工、養鶏などの様々な事業を、地域興しとつなげながらおこしていきます。

## すいみいの由来

会社名の「すいみい」とは、ある童話から子ども達がつけました。ある魚の群の中に、「すいみい」という色の違う魚が一匹いて、いつもいじめられ、のけものにされていましたが、ある時、大きな魚がその群を襲いに来ると、すいみいが目となって全員でさらに大きな魚のかたちをつくって追い払うという話です。つまり、自分たちは個性も強く、ぶつかることもあるけれど、みんなで力を合わせて頑張っていきたい、大きなものに打ち勝ちたい、という子ども達の思いが込められています。

第一回の役員会では、定款を読み直し、会社運営の基本ルールを確認し、今後に向けての所信表明をそれぞれが行いました。「キノコの生産を軌道に乗せて、売り上げ目標を達成したい。」、「販売だけでなく、ほかの仕事もやってみたい。」「明日からは絶対に遅刻をしない。」と、緊張した面もちで、決意を述べました。講長や書記を決め、記録もしっかりと取るという、いつものミーティングとは違う雰囲気に、当初は戸惑っていた彼らでしたが、2回3回と進めるうちに進行もスムーズにな

り、主体性が現れてきました。今までの事業内容を振り返り、受け身でいるうちは商品の質も上がらないし、売り上げも伸びない、と全員でたまごスープの開拓にあたることを決め、宛名書きやチラシ作成に取り組んでいます。役員報酬についても、給与とは違って、自分たちで作り出さない限り、誰も出してはくれないんだ、ということを確認し、お互いの仕事を評価しあって決めようと、継続して審議中です。

大人の弱さもあって立ち上げが遅れた子ども有限会社が、ようやく歴史的

な第一步を踏み出しました。本当に真価が問われるのはこれからです。今の厳しい経済状況にあって、事業体として成立させていくのは大変なことですが、大人も子どもも共に育ちあい、たくましさや優しさを身につけ、真に自立していくことが、事業体としても発展していくことにつながると考えております。将来への不安を抱えながらも、夢を持ってここに参加している若者たちと、可能性を切り開いていきたいと決意を新たにしています。

(代表取締役 吉見敦司)

# インドヒマラヤ・チャウチャウ峰登頂記

40年卒 宮崎 捷二

1997年(H9)7月23日、群馬高校教職員インドヒマラヤ遠征隊の10人は、成田から蒸し暑いデリーに飛んだ。1980年のCB53峰(シャルミリと命名)登山とラダック・ザンスカールトレッキング遠征を皮切りに、インドヒマラヤは今回で第4次の遠征になった。私宮崎にとっては3回目になる。

目指す山域は、インド北部ヒマチャル・プラディッシュ州のスピティ地区にあり、チベットとの国境に近い故に、軍事上の関係でこの地域はごく最近まで外国人には解放されていなかった。

デリーで物資を調達し、3日後にはバスで登山基地の町マナリへ移動。28日にはヒマラヤの地に向い、いきなり標高3978mの霧のロータン峠を越える。頂上付近では憧れの「青いケシ」と対面し、初めての者は皆大いに感激をする。この日はからだを高度に慣らすため、先を急がずチャンドラ川沿いの標高3600mの地チョタダラにて幕営。とは言え3人が頭痛やめまい発熱などの不調を訴える。この地はしばしば盗賊が出没するというガイドの話、テントの外に物音がしないかとついついじっと聞き耳をたててしまう夜。夜明けの無事にホッとする。

翌日、更に高い4550mのクンザン峠を越えスピティ谷に足を踏みいれる。先のロータン峠からここクンザン峠までは、私にとっては1980年のトレッキングの際に通ったことのある懐かしい地である。スピティ谷では広大な河岸段丘面を走ったり、時には絶壁を縫うルートに肝を冷し、目指すチャウチャウ峰登山基地の町カザに到着。

翌7月30日、カザの町からジープで麓のランジャ村へと高度を上げて行く。谷あいの道を抜けると、茶色の背景に、ひっそりと音もなく散らばっている家々、畑の縁がアクセントをつけた村の全体が目に飛び込んでくる。どんよりとした雲に上半身を隠されたチャウチャウ峰がもう1枚後ろの背景



ロータン峠の青いケシ

を作っている。鮮やかな  
紺青のスクリーンに真っ  
白な姿を期待していたの  
でちょっとびりがっかり。

牛やロバに荷をくくり  
つけ、隊員は食料・水・  
防寒着・カメラなど軽い  
荷を負いキャラバンを開  
始した。4400mの海拔は  
ゆっくりペースを強いる。  
初めのうちはアンモナイ  
トの化石を探しながらの  
余裕歩き？ いやいや空



チャウチャウカンニルダ峰

気の希薄な環境と闘いながら、慣れない隊員にとっては喘ぎ喘ぎだ。牛や牛方たちは  
トットと進みどんどん小さくなつてゆき、やがて山なみにのみこまれてしまう。ベ  
ースキャンプはまだかまだかと思えど一向に着く気配なし。ただひたすら歩くうちに、  
当初ベースキャンプを予定していた4600m地点を超え、牛方の案内で一気に5100mに  
引き上げられてしまつて。体力・気力を使い果たし途中から牛の背に世話になる  
者も出る始末。6時間余の苦闘でベースキャンプに着きはしたが、半数ほどの隊員は  
ぐつたり朦朧として設営作業に加われず。それでもとりあえず第一閂門を突破した。

あまり予想もしていなかった雨や霰に足止めされ、ほんの少しのルート偵察しかで  
きなかったベース生活の初めの5日間のうちに、心配したとおり高度順化がうまくゆ  
かず、4人がカザの町まで下りざるを得なくなつてしまつた。ベースに残つた元気組  
6人が二手に別れ行動をする。宮崎の加わつた偵察ルートで前日双眼鏡で狙いを付  
けておいた南稜は、取り付いてみると雪が薄くガレ岩が時々靴の底から崩れ落ちる。時  
に快適な尾根筋も現れはしたが、ついには大岩が行く手を阻み、回り込みを失敗すれ  
ば数100mは滑落し、途中の岩に激突間違ひ無しだ。「無事に引き返せないかもしれ  
ない」との不安が襲う。ベースまでの下りの時間も考えるとこれ以上の前進は危険に  
つながる。無理は禁物、踵を返すことにする。

8月5日、二手の偵察の状況を検討の結果ルートを南西稜と決定。我々6人とポー  
ターらを含めた10人で前進キャンプ設営のため10時12分ベースを発つ。標高5600m地  
点を前進キャンプサイトと決め、酸素の消費と供給のバランスを崩さぬよう緩慢な動  
きで作業を進める。カラーメンの夕食を済ませたくつろぎの時に、何とも美しい夕陽

が刻々と雲を染め分けて沈む。翌6日、ルート工作班は5940mまで達したが時間ぎれ。荷揚げ班はベースまで下り食糧と登山用具などを補給する。

8月7日、7時30分、ルート工作・アタックを兼ねての行動開始。ポーターら3人もロープを担ぐなどの援助のために加わる。我々6人全員でトップを交替し、ロープをフィックス（固定）する作業に身を投じた。「数歩進んでは連續の深呼吸」の繰り返し。時に雪の下の硬氷がスノーバーの刺さりを拒否し苛立たせる。時に急斜面では雪が引っ張られ、クレバスが小さいながらも口を開けていて決していい気はしない。刻々と時間が過ぎるわりにはピークがなかなか近付いてくれない。まったく世話のやけるチャウチャウカンニルダ峰だ。50mロープを19本張ったところで何とか目途がついてきた。

苦闘の末の15時40分、一次隊の6人が頂上に立つ。万歳を叫んだり、握手を交わしたり、各々が各々の表情と声音とアクションで喜びを表現している。そんな姿を見ていて自分の嬉しさも確実になつていった。そして目が合った隊長のヘルメットを何発か叩いてしまった。握手では自分の気持ちを表現できそうになかったからだ。この日の為に用意した手製の旗に日付の「7」を記入することができてホッとした。今回の遠征が偶然私の勤める桐生高校の「創立八十周年」の年に当たり、ラッキーな記念となった。やや離れて、ポーターらが我々を見守っていてくれた。

頂上着の時刻が遅かったしするので長居は無用。前進キャンプを通り越し、一気にベースキャンプまで下り、カザの町から何とか回復しベースに上がって来ていた4人とも再会できた。翌日は全員完全休養日、夕食には日本食をつくりインド人スタッフに馳走する。

8月10日、いよいよ二次隊がベースを出発し前進キャンプへ。翌11日の頂上を目指す雪稜での動きは、ベースからも手に取るように双眼鏡で追える。「12時25分、頂上に着きました！」と無線機からの声が弾んだ。



第1次隊登頂成功

# 岩登りしましょ！

松林 孝憲

去年の春大学をあっさりと卒業。それからは昔とは異なりちょこまかとした活動が多くなった。今のが窮屈なまでに少ない自由時間を何とか活用しなければならなくなつた。関東平野を囲む近郊の山へ、そしてとりわけ岩へとなんとか足を向ける。大学の時だと好きな時に長期間活動、そして広範囲にわたって活動ができた。北、中央、南アルプス、東北の山々・・。ゆったりとした山旅ができ、山以外にもいろいろなことができた。しかし今では、活動形態が限定され、時間の少なさを表すかのようにアプローチも各停から特急、そして車へと変わる。

去年の4月から、縦走、沢登りも楽しんだが、メインは岩登り。いわゆる昔に言うゲレンデ・三ツ峠や越沢バットレスといったクラシカルな岩場も何度か足を向けた。だけど最近はちょっとタイプの違ったフリークライミング主体の岩場のほうが多い気がする。特にどちらが好き、嫌いという訳ではない。ただなんとなく・・フライと。どちらにせよ、なにもしないでいるのが許せないからか、それともただ淡々と時が過ぎていく普段に飽きたのか。

そこで私が去年の4月から訪ねたいいろいろな岩場の寸評をしてみよう。

まず私の二ヶ月間の大坂時代の岩場から

## ★百丈岩（兵庫県・裏六甲）

クラシカルな岩場。JR福知山線道場駅下車後クライマーらしき姿を見つけ、その後をつけていたらここにたどり着いた。駅から30分ぐらいで行ける。スケールもでかく面白そう。ロケーションもなかなか良い。岩登りのタイプとしては人工登攀中心か？

## ★不動岩（兵庫県・裏六甲）

ここは上の百丈岩の後にいく。JR道場駅から南の方角を見上げると、それらしいのがはつきりとわかる。岩はフェース中心、プロテクションもリングボルト。上と違ってフリー中心らしい。傾斜は緩め。

## ★鳥帽子岩・駒形岩（兵庫県・裏六甲）

ここも上機の岩場と同じくついでにいく。ついでといつても実はここに一番行きたかった。道場駅から30分ぐらい歩くと、林道にそれらしい駐車スペース。そしてしばらく行くと踏跡。いよいよ怪しい。その踏み後をしばらく辿ると、岩の匂いが・・。まあ、とにかくここは向かい合って二つの岩場があり、上記二つの岩場より開拓も最近行われている。内容も現代的なフリークライミングだ。したがってプロテクションもすべてボルト。岩もチャート系で堅そう。ハンギングしたルートはなさそうだった。

## ★北山公園（兵庫県）

ボルダーランド。住宅街の中にある。阪急甲陽線甲陽駅下車。有名な女子大の近くにある。一人でやるとちょっと恥ずかしい。公園から少し外れたところでやると、下地が悪く恐い。というわけで近くの仁川渓谷に・・。

## ★仁川渓谷（兵庫県）

ナントカ公園を奥に行くとある。渓谷といつても、北山公園同様、大阪と神戸の真ん中に位置する。ここは一人寂しくセコセコと岩に通う私を見かねてか、単なる物好きかどうか知らないが、大阪の友人が付き合ってくれた。しかし岩場までのアプローチが分からず妙なところを登る。後で分かったのだがこの岩場は、崩壊が激しいらしい。でも岩の上に家があったが・・。次はこの友人から紹介された蓬莱峡へ・・。

## ★蓬莱峡（兵庫県・裏六甲）

宝塚駅から有馬温泉へ向かうバスで30分ぐらい。バスから白い奇岩が見えたるそこで降りる。しかしこの奇岩は風化した花崗岩でとても登れそうにない。そこから更に奥へ進むと、箱庭のようにまとまつた高さ20メートル位の凝灰岩らしき岩場がある。ここは、関西方面の初心者クライマーにとつ

ていい練習場となっているみたいだ。またアイゼン・手袋登攀の練習にもよく使われているらしく、岩肌がアイゼンの跡だらけ。私は、ここでちょっとしたフリーソロで遊ぶ。

★蝙蝠谷（兵庫県・裏六甲）

ここに行く時ガイドブックを忘れたので迷り着けず。ただそれだけ。じゃあ、関西のクライマーを育てた堡壘岩へ行きましょう。

★六甲堡壘岩（兵庫県・六甲）

クラシカルな岩場。関東で言えば三ツ峠みたいなものか。しかし岩もチムニー、クラック、フェースと変化に富み、岩もしっかりしている。スタイルもフリー主体。アプローチも六甲ケーブルを降りてすぐ。岩から神戸の港がバツチリ見える気持ちいい岩場。それほど高くなさそうだが一度は行ってみよう。

★六甲ロックガーデン（兵庫県・六甲）

名前からしていかにもとおもえるので行ってみた。しかも日本ロッククライミング界の草分け的存在藤木九三（日本登山史に必ず出てくるR. C. C創設者）を生んだところでもあるし・・。しかしそこは・・。その後六甲を横断して有馬温泉へ。

関西の岩場全般的にいえることは、とにかくアプローチがいい（道さえ知っていればだが）。駅前岩場と行った感じ。関東平野に住んでいた私には信じられないくらい。そのせいもあってか都市部に人口壁はあまりなさそう。しかし大阪・神戸という大都市を少し離れると豊かな自然に囲まれた岩場に行ける。都会に疲れた体を癒すには持ってこいかも。

そして1997年6月、2ヶ月間の大阪時代も終わり東京へ（といつても埼玉県）  
関東復帰第一弾

★越沢バットレス（東京都・奥多摩御岳の近く）

恐かった。恐怖のあまり登れなかった。もうピトンルートは登れない身体になったのか。

でもこの岩場、本当は面白いよ。右ルートの滑り台に行ってみよう。結構ロケーションもいい。谷に音が吸収されてかコールは、まったく聞こえない。ではこの近くの御岳ボルダーへ

★御岳ボルダー（東京都・奥多摩）

多摩川上流部に広がるボルダー。それなりに楽しめる。しかし今では訪れる人が希。そういった中で私は、大雪の中でもいった。

補足・・多摩川流域にはたくさんの岩場がある。その中で私の行った（行こうとした）もの。

雲仙スラブ…なんだこりや。

マコ岩…いったいどこにある？森の中をき迷っただけ。

ほかにも性質も岩質も異なった岩場がたくさんある！

★湯河原幕岩（神奈川県・箱根山系）

箱根の外輪山幕山のふもとのフリークライミングエリア。概ねルートは短いが、ルートの数は、400本はあるだろう。気軽にキャンプ（ここ一、二年でものすごく整備された。前は単なる野原だったのに）して、概ね傾斜の緩いルートが多いため気軽に取り付ける。特に茅ヶ崎ロックエリアなど。但し、フリークライミングの場合ルートが短い、傾斜が緩いということは、危険もあるので注意されたり。

★伊豆城山（静岡県）

伊豆半島の付け根にある。ここはでかい、スケールもある。マルチピッチのフリークライミングが楽しめる。ルートもたくさん。上部岩壁帯は、前傾壁。ぜひ一度は行こう。でもキャンプ場は、墓場の中だけ。

★伊豆城ヶ崎（静岡県）

日本フリークライミング史上重要な位置を占める岩場。海岸線の断崖絶壁で観光地としても有名。火曜サスペンス劇場で殺人現場にもよくなる。さて、岩のほうだが歴史を感じさせるクラックルートが多い。つまり痛い・恐い・しんどいという三拍子がそろっており、悲壮感と緊張感を味わうことがで

きる岩場でもあるのだ。一概に城ヶ崎と行っても広い。南北に10キロはある(すべてではないが)。また潮の満ち干潮によって取り付けるかどうかが、左右される。中にはボートで取り付くという度胸満点ルートもある。

#### ★広沢寺の岩場 (神奈川県・西丹沢)

丹沢の広沢寺温泉の奥。岩は、スラブ、スラブ、スラブ。メイン壁の向かいにも小さな岩場があるが、こっちも面白い。

#### ★小川山 (長野県・奥秩父)

城ヶ崎と同じく日本フリークライミングの聖地。きれいな花崗岩、快適なキャンプ場(ほんとに快適、家族サービスにはもってこい)。岩は、やはり歴史を感じさせるクラック、スラブといったルートが多い。落ちたらどうなるのといったスラブのルート、ヤスリのような花崗岩で血みどろになるクラック、よく分からぬアプローチ。それでも行きたくなるこの小川山。一度は行こう小川山。

追記:今は、フェースルートも多い。これでもか!という程頑丈なボルトも打ってあるので安心?。ちなみにこの小川山の近くには瑞牆山(みずがきやま)いうこれまたすごい岩場もある。ここは秩父の秀峰麗峰群の一角、岩登りに飽きたら金峰山に足を伸ばしてみてもよい。

#### ★三ッ峠 (山梨県・御坂山塊)

言わずと知れた三ッ峠。関東の超クランカルな岩場。関東のクライマーなら絶対一度は行っているだろう。そしてだれしも経験があるように、行きの登山道でとばしすぎて岩に登る前に疲れないように。でも目の前に聳え立つ富士山を見ながらのクライミングは、疲れを忘れさせてくれるかも。

#### ★双子山 (埼玉県・奥秩父)

今や小川山、城ヶ崎の地位を奪った石灰岩王国二子山。晴れた日には眩しいぐらいに岩壁が輝く。西に行けばいくほどそれが顕著になる。IV, V級といったRCCグレードの付いたクランカルなルートもあるが、今はフリークライミングが中心。西岳、東岳と分かれている。アプローチは、車から降りて20分と近いが、行きの林道で普通の車だと絶対腹を何度もかする。私が大雪の後双子山を行った時は車の腹で岩を砕きながら進んだ。またこの岩場は、初心者が行つても楽しくない。非常に厳しいルートばかり。ちなみに本州最難ルートがここにある!

#### ★名栗・河又の岩場 (埼玉県・武蔵丘陵)

比較的新しい今大流行?の石灰岩の岩場。よくこんな所を発見したもんだと感心してしまう。ついでに、石灰岩というと洞窟も付き物(この岩場は洞口となっている)。

話は変わるが、この岩場に行くと決してメジャーになれない岩登りの悲しさを感じる。と、言うのはここは、原則的に登攀禁止。ただ今は、具体的な規制がないため、静かに利用されてはいるが。。ここに限らず、今回書いた岩場も少なからずこういった問題を抱えているところが多い。静かにひとつそりと遠慮して登るしかないのだろうか。

#### ★鷹取山 (神奈川県)

何も語ることはあるまい。何度通ったことか。のワリにはヘタクソ。

#### ★唐沢岳幕岩(北アルプス)

重い荷物に、ほとんど沢登り状態のしんどいアプローチ、天場での虫の猛襲、そして雨雨。。。これぞ“本番”的”の岩登りなり。

今は、時間的な制約で(なんと紛らわしいことか!)こうしたちょこまかとした岩登りしかできないでいる。しかし私の目は、ある一定方向をむいている!?.その方向に一歩でも踏み出すためにはフリークライミングも有効な手段、いや欠かせないものとなる。未登の大岩壁。雪崩、落石。。いかにそこをスピード的に通過するか。それに成否、そして命もかかってくる。そこでもっとも登攀速度が早いフリークライミングが有効となる。

とにかく大きな舞台で自分が通ったところがルートになる山登りをするためにも。今は、じつと鍛錬の時なのか?。。と、思う今日この頃です。

# 韓国アカスリ日記

種子田 美和

その昔探検部に在籍していた頃なら到底ゆるされなかつたであろう韓国エステツアーなるものにいってきた。長い年月の間に、先輩諸氏にかなり洗脳された脳<sup>注1</sup>が一般人なみになつたということで私としてはなかなかいい感じだと思うがみんなはどう思うか<sup>注2</sup>。

サウナとあかすりで1万円。割高なのかもしれないが二泊三日のパッケージツアーゆえいたしかたあるまい。友人Rと二人、期待で高なる胸をおさえつつ早速ロッカールームへとむかつた。ロッカーの前では何人かの女人（以下おばちゃん）がどなりちらしていた、というのは気のせいでただ大声で指示をだしているのであった。せきたてられるようにして服を脱ぐRと私。おばちゃんの前でパンツを脱ぐのをためらっている余裕はない。スッポンポンになり、いわれたとおりに化粧を落とし、浴室の入り口でタオルをもらい中に入る。

中には別のおばちゃんがまつており日本語で説明してくれるのだが、あまり意味はわからない。有無をいわさず大きな麻袋をかぶせられて大きなかまどのようなものの中に入る。これが汗蒸幕というものらしい。

薄暗いかまどの奥には赤い火がみえ、そこから少々離れたところに麻袋をあたまからすっぽり被つた日本人が3人座っている。不気味だ。

フレンドリーにその先客がはなしかけてきた。「どこからですか？」麻袋のなかに汗だくの顔がのぞく。「横浜です。」と答えつつすでに背中には汗が流れ出す。ダラダラ～。こりやええわ、もうやせているかもしれないのね、と思うと俄然「なにがなんでも限界までねばるぜ」とやる気がわいてきた。先客たちは暑さに耐えきれず早々にでてゆき、Rと私は二人っきりでひっそりとしゃがんでいた。そしてまだまだしゃがんでいたいのだが仕事熱心なおばちゃんにせきたてられて仕方なく浴室へもどつた。

おばちゃんはひどく乱暴に「塩サウナー、水風呂一、からだ洗う一、サウナー、風呂一。塩サウナー、水風呂一。からだあらって一、サウナーーー」となにがなにやらわからんことをいうのだがつまり各種ある風呂を2ラウンドまわってこいということらしい。ハードな風呂の攻防になんだか闘志が湧いてくる。私はあまり長く風呂に入れない質なのだが、

<sup>注1</sup> 現代には考えもつかぬ探検部内の常識というものがかつて存在した。テニスしているところを発見された時点で即退部はあたりまえ。鈴木広視氏などは「男はスカートはかねえだろ？女は煙草吸わねえんだ」という名言を残している。（しかしその後、室賀の尽力により女子部員であっても煙草はすってもいいことになる。いいんだかわるいんだか。）

<sup>注2</sup> 「ええっそれ以上どこを奇麗にしたいの」なんてきいちゃイヤよ、ふふふ。

やはり本場か、うまく組み合わせてあって気分よくほいほいと風呂をまわることができた。しかしそれでも1ラウンド終わる頃気分が悪くなった女の子が風呂サイドにしゃがみこんでいた。鍛え方が甘い注1。

2ラウンドが終了すると、いよいよあかすりの順番待ちだ。黒いブラとショーツ姿の恰好幅のいい三名のおばちゃんたちが威勢よくアカをすっている。ウヒヒ、たまげるほどアカが出るのかしらあ、でも美和ちょっと恥ずかしいな。と期待が高まる。番号を呼ばれ、いよいよあかすりの台の上へ。

「私はこのおばちゃんがあかすってくるのか。うんとサービスしてねえ～」と心の中  
でつぶやく。おばちゃんはおもむろにあの有名なアカスリタオルで私の身体をこすりだした。力強い腕がみっしみっしと動いている。「そ、そんなところまでえ？」などと躊躇する暇も与えない速攻だ。首から爪先までごしごしこすってもらったが、先ほどの2ラウンド風呂めぐり効果で全く痛みはない、それどころかかなり気持ちがいい。まわりをみまわすと他の客のアカが背中や腹にたまっているのをみることができた。こいつら普段風呂はいってんのか、と疑うほどだ。しかし私のアカも友人Rがしっかりと見とどけてくれたようだ。こすりおわるとおばちゃんは手桶で勢いよくお湯をかけた。

その後、キュウリパックなるものをしてもらったがヒンヤリして心地よかった。そして仕上げに牛乳マッサージ。全身マッサージなんて夫以外の人にしてもらったことがない。それをこんな、自分の母親位の年齢のおばちゃんにやってもらってもよいものだろう。おばちゃんたちにも私や他の観光客とか。。。。という思いが不覚にも脳裏を横切った。おばちゃんたちと同じく年頃の娘のあかすりをする同じくらいの娘などがいるだろうか。仕事とはいえ、娘と同じ年頃の女のあかすりをするなんていやじゃなかろうか、そう思ったらちよっぴりセンチメンタルな気分になった。いかん、また悪い癖が<sup>注2</sup>。

とても気持ちよかったです。あかすりではあったのだが、一回やればもう十分だ。そういう感想を抱いて、その夜は思い残すことのないように屋台へでかけて死ぬほど焼き肉を食べた。日本に帰ったらせいぜい親孝行でもしよう、と少しだけ思った。

注1 ちなみに私は今でもスクワット200回はかるい。(えっとん)

## 探検部入部まで

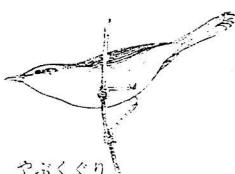
1年 千葉香澄

私が探検部の存在を知ったのは、高3の夏だった。Open Campasのときにもらった大学のパンフレットの写真の一枚に、学生がキャンパス内を歩いている、というのがあり、その学生の後ろに茶系で「探検部」と書いた看板があったのだ。その3文字の怪しい響きに、少し気になりつつも、少し冷笑していた。でも、それから間もなく、私の気持ちは変わった。

クラスで進研ゼミをやっている子がいて、志望校の「大学情報レポート」（在学生による）をもらっていたので、いいな～と言ったら、市大の大学情報レポートをもらってくれて、5枚くらい入手できた。その1枚が95年度3年生探検部員がかいたもので、非常に部のことを楽しそうにのべていたので、いいかも!!と思ったのだ。

その当時の私の成績は停滞ぎみで、ここに入るにはちょうどボーダーにのるかのらないか、というところだった。…にもかかわらず、たまに、まわりの人気が心配するほどプラス志向になることがあった私は、「市大に入れたら、探検部、水泳部（マネ）ESS、文化研究系（海外事情研究部など）の、どれかには絶対入るぞ！」と、とらぬ狸の皮算用をしていた。

実際に市大に入って、部の説明会に行ったのは、唯一この探検部だけだった。…というか、ぼんやりして他の部に行かないでいたら、電話がきて、「入るんなら、今度の水曜日部室に来て。」と言われて、即決した。でも入ってみて、この決断が一番良かったんじゃないかな～、と思う今日このごろである。



## 釣りと私 最終章

星川 亮

いつのまにか、そう、この大学に入ってから4年の月日が経ってしまったことに気づいている。4年前、最初に私がこの部に入った時、今でも目を閉じると、その時の光景が鮮明に浮かんでくる。やる気のない説明会（マッチさんは頑張っていた気もするが）、汚い部室、頭の低いHTカ。すべてが昨日のことのようだ。（笑い）それから、4年間、いろいろなことがあった。それも、この部に出会えたおかげだと思う。しかし、釣りをしていなければ、恐らく出会えなかつた。（それよりは、入ろうとは思わなかつたと思う。）

釣りをはじめて、ずっとあこがれていたのが渓流での釣り、つまり、沢である。当時の私にとっては、遠い存在のように思えた。管理釣り場でのニジマス釣り程度が関の山であり、目の前で放流されたものを釣り上げるという何とも面白味にかけるものだった。（当時の私は喜んで釣りをしていたが。でもニジマスはおいしかった。特に塩焼は絶品。）しかし、チャンスは訪れた。大学に入って、探険部のポスターを見た時、私は深く感動した。活動の一つに沢登りがかかげられていたのだ。こうして、私は探険部に入った。

幸運なことに、私の入った年は、メインの活動が、沢登りであった。（他の私と同学年の者達は嫌がっていたが。）しかし、夏合宿の前に行ったのは、丹沢が主で、釣りをすることが出来なかつた。例え釣りが出来たとしても、釣りをする心の余裕はなかつたように思う。げんに、一年の夏合宿で行った岩井又沢では、大イワナがたくさんいるというのに、釣りをしたのは、沢の中に入って2日目の朝に一度きりであった。でも、それで20cm位のイワナ一匹釣つたけどね。（ジマン）しかし、肉体的にも精神的にも完全に疲れ果てて沢を登り終えたのを私は覚えている。それだけに、最初に山道が見えた時には、感動と歓喜で走り出してしまつた。この時は、もう絶対沢登りなんてやるものかと思ったものだ。同時に、神秘的なもので、己の全て、総合的なものを要求されてくるということも知つた。これが、今なお、私を沢にひきつけている。しかし、沢をいかに早くつめるかということにのみ頭がいつてしまい、沢そのものを楽しめるという領域には未熟のため到達していな



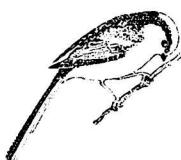
い。

そんな中、3年の夏に行った、白神山地の追良瀬川は楽しい沢だった。30cm over のイワナ釣ったし。（多分、本腰入れていけば、一人10匹は、数時間で釣れるはず。）これで、肩の“ダッキュウ”さえなければ、良い思い出のみ残っただろう。何故楽しかったのか考えてみると、それほど技術のいらない沢だったので思った程時間がかからなかった。そのために、早め早めの行動が出来たためだと思う。要は、技術なのだ。それが、高ければ高い程、恐らくより難しい沢を楽しくいけるはずだ。でも、精神的に追いつめられた状況というのも、私は結構好きなのだが。

文を書いているうちに、「釣りと私」という題から、離れてしまった。そう言えば、最近、釣りに行っていない。私の原点は釣りから始まった。釣りなくして私は、今の私は、いない。また、原点に戻って、自分探しに行こうと思う。探険部よ、4年間ありがとう。私は君を決して忘れない。

—完—

追記　　読み直してみたが、何とまとまりのない文だろう。別に、読んでも面白くないよ。



## 会員近況紹介

大野 正夫 (1960 年入学)

4 月 18 日はセヴ (フィリピン) にいます。

河合 武臣

家族で春スキーに行ってきました。リフトで山頂まで行っての雪山の景色はとてもきれいでました。

元気でやっています。でも年のせいか物忘れが多くなりました。

宮崎 捷二 (1961 年入学)

昨年夏にインドヒマラヤに遠征したまとめを今つくりつつあります。(完成は五月頃予定。) みなさんによろしく。次の機会もねらっています。

小澤 幸重 (1965 年入学)

近頃は丹沢にも行ってません。海外の予定は 3 回位ありますが、今度はアルプスへ行ってみたいと思います。

紙村 徹 (1967 年入学)

1 月 25 日に、物心両面で私を支え続けてくれた母が急死 (心不全) し、目下のところ「宇宙が壊れた」感で、何もかも無意味に思いつつ、一人暮らしをしています。さみしいので、関西にお越しの折りは、是非我が家にお出で下さい。飲みましょう。

小森享二 (1968 年入学)

昨年 10 月下旬に、1 年間の単身赴任生活に別れを告げ、大阪から東京へ帰ってきました。今世紀中は帰ることが出来ないと思っていましたが、1 年という異例の短さで帰ることができたことは幸運でした。そして今年は三人娘が大 3, 高 3, 中 3 で二人の受験生を抱えていましたが、二人とも志望校に合格できました。

川尻哲夫

本年 1 月から子会社に出向となりました。土曜勤務もあり 4 月 18 日は運悪く勤務日に重なりました。この所、探々会には欠席が多くなり、気懸かりです。

野口 道章 (1977 年入学)

いつも欠席で申し訳なく思っています。

名古屋に来てすでに 9 年目を迎えました。昨年は会社の同僚と子供とそして単独にて山へ 7 回行きました。今年も春から山行を計画しようと思っています。

何か、探々会でもイベントを持ちたいですネ。では、みな様によろしく。

坂井 善久 (1979 年入学)

中学校の教員をやっています。

年度初めの事務でちょっと身動きできません。盛会をお祈りしています。

浅香 辰也 (1983 年入学)

先日、兵庫県の植村直己記念館と生家へ、氷ノ山の登山の帰りに立ち寄りました。そこで実感したことは、こいつは本当に未知なる大自然が好きなことと、劣等感に近いハングリー精神があったんだなと・・・。

内野 健太 (1983 年入学)

現在、東京工業大学大学院修士課程に在学中です。

ホームページアドレス <http://www.fz.dis.titech.ac.jp/~uchino/>

高梨 洋之 (1985 年入学 : 海上自衛隊勤務)

3月 12 日から広島県江田島の第一術科学校というところで勉強します。4月の会合には参加できませんが、皆様に宜しくお伝え下さい。

10 年 7 月 24 日に新しい任地が決まりますので、その時はまた連絡します。

本多 秀雄 (1985 年入学 )

不在の為、(4月 18 日の総会には)欠席させて下さい。

佐藤 修史 (1987 年入学 )

4月 1 日付で横浜に勤務になります。

種子田ふあみりい (種子田 幸太郎 : 1985 年入学、種子田(旧姓:室賀)美和 : 1988 年入学)

タネダさんは「もう脱会したい」とか言ってます！そのうちビッグになつたら(死語)かぞくでゆきますのでよろしくおねがいします。みなさんにもよろしくお伝え下さい。あ、そうそう、最近私もトレーニングしてます。(笑) (美和)

伊藤 源 (1989 年入学)

この間、三浦と一緒に吉見(1989 年入学、愛知県で農業に従事)のところへ行つきました。奴は、女から手彫りの木製スプーンをプレゼントされていました。深い愛を感じました。

三浦 研 (1989 年入学)

子供の世話を日々追われています。

児玉 亮

仕事なので総会には出席できませんが、皆様によろしくお伝え下さい。

今年の2月22日に子供が産まれました。男の子でした。悠(ゆう)と云います。またよろしくお願ひします。

小森 啓志(1990年入学)

ただいま、田村大先輩宅にて居候をしております。

稻田 俊(1991年入学:信濃毎日新聞記者)

四月より駒ヶ根支局に配属になりました。自宅が職場です。遊びに来て下さい。

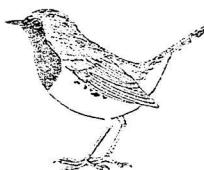
佐藤 栄宏(1992年入学:大分合同新聞記者)

大学時代の気持ちをいかに仕事に生かせるかが、仕事をおもしろくする課題になります。

松林 孝憲(1993年入学:ヤンマーディーゼル勤務)

埼玉で農機具を売って生活しております。

もうすぐ田植えの時期なので、休みがなさそうです。悲しい・・・



## 1997 年度 探検探査の会 会計収支報告

(1997 年 4 月 1 日～ 1998 年 3 月 31 日)

### 収 入

◆前年度繰越金	130,744
◆会 費 収 入	141,000
◆利 息	169
◆小 計	271,913

### 支 出

◆郵 送 料	29,680
◆コ ピ 一 代	2,000
◆文 具	3,415
◆会 議 費	2,400
◆会 報 製 本 費	52,500
◆そ の 他	826
◆小 計	90,821
◆收 支 計	¥181,092

(会計：佐々木 仁)

# 1998年度探検・探査の会 総会報告

事務局

## 1. 開催日・会場

- ・1998年4月19日（土）15:00～ 横浜市職員会館いせやま会館

## 2. 出席者

- ・河合、吉野、高松、小森享、三浦茂、田村、佐々木仁、小森啓、穂積、小林、松林（OB）
- ・岡本、関口、熊原、佐藤アキラ（現役）

## 3. 会計報告

- ・詳細は22頁参照。会計監査が総会に出席しない場合は、会計報告に承認印を捺印することとする。

## 3. 会則の見直し

- ・会の事業の中に「横浜市立大学探検部への援助」を加える。  
(後日現役より、テントを購入・寄贈して欲しいとの要望があった)

## 4. 現役活動報告

- ・夏に中国自転車行を計画中。南米で川下りやりたいが具体的なプランはない。

## 5. 会 報

- ・原稿の集まりが悪いため締切を5月の連休明けまで延ばす。

## 6. 40周年記念集

- ・年譜作成は作業中。4期（1989年以降）の原稿依頼はネバール（メラ・ピーク、チュルー）、オーストラリア自転車行、ユーコン川下りなど海外遠征で報告書のまとまっていない活動を中心とする。
- ・2期（1969～1978年）後半の活動資料が残っておらず、年譜作成が困難。
- ・書き下ろし原稿の締切は7月31日とする。

## 7. 遠征計画について（OB穂積より）

- ・来年、ボリビアの日系移民百周年の記念イベントに併せて、移民のボリビアに至るルートを川下り等で再現するプランを考えている。
- ・在日ボリビア大使も乗り気であり、探検部現役中心の活動として実現できないか。  
(後日、探検部部会にて2年生中心の有志により、計画準備が進められることとなった。  
OBの参加は未定)

# 横浜市立大学探検・探査の会 会則

(1998年4月改訂)

## (名称)

第1条 本会の名称は横浜市立大学探検・探査の会とする。

## (目的)

第2条 本会は「地球の自然」と「人間の文化」を愛するものが、世代や分野を越えた相互協力を通して未知の領域を求める探検の諸活動を行うことを目的とする。

## (事業)

第3条 本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 探検活動の主催及びその援助
- (2) 探検に関する情報交換及び研究活動
- (3) 会報の発行及び探検報告活動
- (4) 会員相互の交流、親睦
- (5) 横浜市立大学探検部への援助<sup>注1</sup>
- (6) その他、本会の目的達成に必要な活動

## (会員の構成)

第4条 本会は、本会の主旨に賛同する横浜市立大学探検部OB及び旧探査会学生部OBをもって構成する。<sup>注1</sup>

## (入会)

第5条 本会に入会するものは申込書を提出し、所定の会費を納入するものとする。

## (運営組織)

第6条 本会は運営のために次の幹事で構成される幹事会をおく。

- 1.幹事は会務一般を行い、総会で選出するものとする。
- 2.次の役職については幹事の互選により選出するものとする。
  - (1)会長は1名とし、会を代表するとともに会務を統括する。
  - (2)幹事長は1名とし、事務を統括する。
  - (3)会計幹事は1名とし、会計事務を統括する。
  - (4)会計監査幹事は1名<sup>注2</sup>とし、会計監査を行う。
- 3.会長及び幹事の任期は原則として2年<sup>注3</sup>とする。ただし、再選は妨げない。

## 旧条文

注0：(条文なし)

注1：横浜市立大学探検部OB（旧探査会学生部含む）及び現役の探検部員をもって構成する。

注2：2名

注3：1年

(会議)

第7条 会議は総会と定例会<sup>注4</sup>からなる。

- 1.総会は本会の最高議決機関であり、定期総会と臨時総会からなる。
  - (1)定期総会は会長の召集により年1回開催する。
  - (2)臨時総会は幹事会が必要と認めた場合ならびに、会員の5分の1以上の請求があった場合に開催する。
  - (3)総会は委任状を含む会員の3分の1以上の出席で成立する。
  - (4)総会においては会則の改廃、活動方針、予算、決算、その他の重要事項を議決する。
- 2.定例会<sup>注4</sup>は総会に次ぐ議決機関であり、必要に応じ会長、もしくは会長の委任を受けた幹事長<sup>注5</sup>が召集し、幹事の過半数の出席で成立する。
- 3.会議の議決はすべて出席者の過半数でこれを決める。

(運営費用)

第8条 本会の運営費用は会費、その他の収入をもってこれにあてるものとし、会費は別途定める金額<sup>注6</sup>とする。

(資格喪失)

第9条 会員は次の各項に該当するときは、その資格を失う。

- 1.退会の意志表示をしたとき。
- 2.会費を著しく<sup>注7</sup>滞納したとき。

(雑則)

第10条 1.会員が本会の名称を用いて探検活動を行うときは、事前に文書をもって計画案を定例会<sup>注4</sup>に提出し、定例会<sup>注4</sup>の承認を得なければならない。  
2.本会会則にない事項は定例会<sup>注4</sup>と総会の議決を経て別に定める。  
3.本会の会計年度は毎年4月1日から3月末日とする。<sup>注8</sup>

旧条文

注4：幹事会

注5：会長

注6：年額2000円、学生はその半額と

注7：2年以上会費を

注8：(条文なし)

## 編 集 後 記

6号をお届けいたします。 今回は、投稿者が少なかったようですが、忙しい中、原稿をお寄せいただいた方、ありがとうございました。この会報誌がみなさんの交流の場になり、また、仲間の体験などを読み、励ましを受ければ幸いと思います。  
会員のみなさんの健康と活躍をお祈りいたします。



探検・探査 第6号

発行年月日 1998年6月

発行者 横浜市立大学探検・探査の会

代表 大野 正夫

編 集 探検・探査の会編集委員会